写真14　忠魂碑（深谷神社前）

1967（昭和32）年に新たに被爆村出身の戦没者258名の慰霊碑が建設された。

第二次大戦を振り返って

長谷川　時秋

「昭和20年8月15日の青い田んぼが忘れられない」。秋田の田舎町がなつかしい。

日本の国は神の国ですと子供の頃から教わり、それを信じてか、日本国民は戦争に負ける事を知らなかった。

明治37年から38年の戦争では、ロシアに勝ち樺太（今のサハリン）の半分は日本のものだった。

昭和16年12月8日米国・英国を相手に第二次世界大戦を起こした。

「ほしがりません勝つまでは」と、死に物狂いで頑張った。が、「井の中の蛙、大海を知らず」で、日本に原爆を落とされ、それに昭和20年8月9日、ロシアが加わり敗戦となり、ギブアップした。またまたロシアにサハリンを全部取られた。

血と血を流す戦争はまだ終わっていない。

1日も早く、平和な世界目指して幸福になろう。

「末の世の末の末まで、我が国は萬の国に優れたる国」

日本万歳

“米兵捕虜の虐待”を想う

鎌田　峰義

それは昭和18年の初秋、私が14歳の時でした。

私の住まいのすぐそばに国鉄の南延岡駅があり、その駅舎に米兵捕虜がいました。捕虜は後手に縛り上げられ、椅子に座らせられていました。そのそばに巡査が1人、駅員が3、4人いて、それを取り巻くような黒山の人だかりです。

私は初めて見る外国人、しかも戦争相手国のアメリカ兵です。身体は大きく色白です。よく見ると額から血が流れています。多分ここに来るまでに痛めつけられたのではないかと思いました。にもかかわらず、ここでもわめきながら顔を力いっぱい殴る者や捕虜の後ろから椅子をけ倒し、床に腹這いの捕虜の頭を踏みつける者、あるいは背中や尻等ところ構わず足蹴りにする者、その度にうめき声と悲鳴をあげていました。

最初は敵兵だから仕方ないのかと思って見ていましたが、無抵抗の仮に敵兵であってもグルグルの簀巻きにされ自由もきかぬ人に打ち続く仕打ちにも限度がありましょう・・・。

余りにもひどいと見るに耐えないと、その場を立ち去りましたが、私はその時、なぜ勇気を出して乱暴な大人達の暴力を阻止できなかったかと、いつまでも、いつまでも、やるせなく哀れな気持ちでいっぱいでした。その後、この捕虜は福岡に連行され、そして銃殺されたと風の噂に知りましたが、私は思います。

一部の誤った指導者によって戦争が起こり、それに追随する、そして戦争を賛美する不和害同する国民にだけはなりたくないと。しかし、世界ではまだ戦争が続いている。

痛恨の思い出

江川　正雄

戦死した兄は、召集により昭和17年横須賀の海兵団[注1]に入団、軍の機密保持のためか、組織管制のためか、入団後の消息はほとんどありませんでした。約2年後の昭和19年夏、突然1通の電報が実家に入りました。

電文は、○月○日16時横須賀出港でした。問題は16時という時間です。当時日本海軍は壊滅的な打撃を受け消滅寸前のありさまでした。その様な時期に出撃命令はどの様な結果になるか兄も十分承知していたと思います。当日両親は、面会時間を少しでも長くと思いだいぶ早目に海兵団の門をくぐり面会を求めたのですが、とんでもないことになっていました。係員はとっくに出撃してしまったと言うのです。驚いた両親は電報を見せ説明を求めたのですが、朝の6時に出撃したとのこと、電文の16時は午後4時です。どこでどう間違ったのか6時と16時の打ち間違いだったのです。

当時、私は横須賀のとなりの浦賀造船所で働いており両親がたずねて来てくれました。昭和19年は最悪の食糧難の時代だったのにどこで工面したのか重箱3つも4つもご馳走を持ってきたのですが、それも無駄になってしまいました。宿舎で父の落胆した姿と母の泣き崩れるのを見て断腸の思いでした。

昭和20年春、私も召集で横須賀武山海兵団に入団。しかし、まもなく、終戦復員しました。翌21年2月、戦死の公報が届き、昭和19年9月テニアン島沖にて戦死。終戦半年後でした。両親は南の小さな島で生きのび帰ってくるかもしれないと、はかない望みを持っていた様でした。

昭和21年秋、市役所から戦没者合同慰霊祭を行うから出席するよう通知がきました。式のあと、戦没者名の入った骨箱を遺族に渡されることになり、その時市の係員ができれば中を開けないで墓地に埋葬するか、お寺に預けるかにしてほしいと言うのです。私は骨箱を受け取った時、あまりの軽さにがく然としました。市から言われたのですが、家に帰って開けてみました。中には英霊[注2]と印刷された紙が1枚入っているだけです。

あれから幾歳月、明治は遥か行方にて、昭和は遠くなりにけりといった感がします。あの電文のミスが当事者にとっては終生忘れることのできない痛恨事です。当時の兄や両親の心痛と無念さを思うと今でも胸が痛みます。

(注1) 海兵団――海軍の新兵教育機関。横須賀には横須賀海兵団と武山海兵団があった。
(注2) 英霊――死者の霊魂を敬称していう語。明治以後は戦死者の霊をさしていうことが多い。

相模野海軍航空隊から米軍厚木基地へ

比留川　政雄

昭和13年頃のある日、私は綾瀬小学校5年生の体操の時間で校庭にいました。その上空を複葉(注1)の飛行機が飛んだのを覚えています。その当時横須賀の海軍航空隊にいた私の叔父金治が現在の厚木飛行場を作るための写真を撮りにきた飛行機だったのです。

叔父は大正9年に海軍に志願し、横須賀海兵団に入団、大正12年に霞ヶ浦航空隊で飛行機の搭乗員としての教育を受けて、その卒業の時は成績優秀で天皇陛下から「御賜」の時計を受領しています。昭和13年8月鹿屋海軍航空隊(注2)付となり、中国の南京(注3)基地に進出し、11月8日の成都空襲では左手掌を機関銃で打ち抜かれる負傷を受け、その活躍ぶりはラジオや新聞で報道されました。

翌年9月再び中国の漢口(注4)基地に進出し、重慶の空襲に参加しましたが、9月29日の出撃の際、漢口の飛行場で、搭乗員大尉搭乗の中隊長機と接触して積んでいた爆弾が破裂して、搭乗していた7名全員が戦死しました。翌々日には戦死の公報が役場へ、私の家には弔電が届きました。11月になって横須賀で慰霊祭が行われ、遺骨はその日の夕方海軍の士官に抱かれて生家に帰ってきました。

12月15日に綾瀬小学校の校庭で村葬が行われ、葬儀の後、菩提寺である大法寺まで100人余りの人々に送られて、墓地に埋葬されました。叔父は遺書を書いて弟三郎に託してあり、開封してみると、村葬は辞退すること。国から支給される弔慰金(注5)の一部を母校である綾瀬小学校へ寄付するよう書かれていました。綾瀬小学校80年史には昭和16年12月にこの寄付金をもとに1,300円でラジオと拡声装置を設置したと記されています。現在墓地には墓碑があります。正面に「故海軍航空中尉従七位勲五等功五級比留川金治之碑」その左下に海軍中将東郷吉太郎書と書いてあります。東郷中将は東郷元帥(注6)の従兄弟で綾瀬にもこられたこともあります。

叔父が所属した鹿屋航空隊は現在の海上自衛隊鹿屋基地で、基地内の資料館には叔父が受けた「御賜」の時計が展示されています。

昭和13年頃から始められた飛行場の建設は、16年5月に綾瀬小学校の講堂へ土地の所有者が集められたことから動きだしました。工事は各地からやってきた建設会社によって行われ、地元の人達も作業員として働きました。

昭和17年3月1日には横須賀海軍航空隊相模野分遣隊が開隊しましたが、4月18日には早くも米国陸軍のB25爆撃機の空襲を受けました。この日私は綾瀬小学校の校庭にいましたが、灰色で濃緑色の機体に星のマークがはっきりと見える超低空で東から西へと2機が飛び去りました。11月1日には分遣隊は相模野海軍航空隊として開隊し飛行機の整備術教育を担当する練習航空隊となりました。

昭和18年4月1日には、厚木海軍航空隊が開隊しました。飛行場の東側に格納庫、兵舎があり、有名な零式戦闘機(注7)による搭乗員の錬成が行われ、翌19年3月には203航空

(注1) 複葉……飛行機の主翼が二重になっていること。
(注2) 鹿屋海軍航空隊……鹿児島県大隅半島南部。戦時中、海軍特攻隊基地があった。
(注3) 南京……中国江蘇省南西部にある省都。古来より、政治・軍事の要地。中華民国国民政府時代の首都。
(注4) 漢口……中国湖北省東部の都市。日中戦争初期、南京陥落後の国民政府所在地となる。
(注5) 弔慰金……戦死者への弔慰をこめて、遺族に贈られるお金のこと。
(注6) 東郷元帥……東郷平八郎のこと。日露戦争に連合艦隊司令長官就任。日本海海戦でバルチック艦隊を破り国民的英雄となる。

隊と名前を変えて、北海道千歳基地へと移って行きました。同じ3月に横須賀基地で開隊した302航空隊は5月に厚木基地[注6]へ移ってきました。従ってこの後は厚木を名乗る航空隊は無かったのですが、米軍は終戦まで厚木と呼んでおり、後に米国海軍厚木航空基地と名付けられたので、現在まで厚木基地の名が使われています。

11月に米軍はB29爆撃機による日本本土の爆撃を始めました。12月3日空襲警報のサイレンが鳴ったので庭に出てみると、4機編隊で8機のB29が飛行雲を長く引いて飛ぶのが見えました。その後、B29は何度も見ましたが、厚木基地は爆撃の目標にはならず、偵察にきた1機が寺尾の報恩寺に焼夷弾を落としただけで火災にはなりませんでした。

翌20年2月になると米軍は艦載機による空襲を始め4月になると硫黄島から発進したP51戦闘機の空襲も加わりました。この空襲は地上の飛行機が目標で、炎上した飛行機の黒煙が空高く上るのが何度も見えました。

8月15日は大東亜戦争が終った日です。ラジオが朝から正午には重大放送があると放送していたので、家族全員でラジオを聞きました。天皇の声は重苦しく難しい言葉もありましたが、戦争を終らせるという意味は理解できました。父が一言、「戦争は負けた」といったのを覚えています。

厚木基地の302空の司令小園大佐は、なお抗戦継続を叫びましたが、マラリヤ[注9]の高熱を発し狂乱状態になり、病院へ強制収容されて、厚木航空隊はわずか3年余りで歴史を閉じました。22日からは復員が始まり徒歩で長後駅へ向う兵隊たちの雨にぬれた姿は哀れなものでした。28日は米軍の輸送機がやってきて、その数60機にも達しました。30日に連合軍最高司令官マッカーサー元帥が到着し厚木の名は全世界へ伝えられました。飛行場に関係の無い厚木の名は今も自衛隊厚木基地として残り、飛行場のあった綾瀬の名は何も残らなかったのは歴史のいたずらでしょうか。

(注7) 零式戦闘機……零戦とも言う。旋回性能に優れ、開戦当初には連合国軍機を圧倒した。

(注8) 厚木基地……1941(昭和16)年に座谷・華川・大華川・大和市の一部に及び敷地に帝都防衛海軍基地として建設開始。当初、相模野海軍航空隊を設置。その後、厚木海軍航空隊を設置、帝都防衛の主要基地となる。1945(昭和20)年8月30日、連合国総司令官ダグラス・マッカーサーが到着、日本に置ける占領政策の第一歩が厚木基地から始められ、日本の新たな歴史が始まった。

(注9) マラリア……蚊により媒介され、マラリア原虫に起因する伝染病。熱帯・亜熱帯の地方に多く、固有の周期性高熱を繰り返す。

忘れようとしても忘れられない

新倉　英雄

忘れようとしても忘れられない戦争により肉親を奪われた悲しみは、二度と味わいたくない。ぜひ後世に語り継がねばならないと思います。戦争により夫を亡くした妻、父を失った子、子を奪われた親もございます。いかに戦争の被害の恐ろしさを感じます。

私の家でも、兄が20歳にして海軍として昭和18年4月に横須賀の海兵団へ現役兵として入隊しました。父母は日頃から「正夫、正夫」と長男でもあるし呼んでいた。鎌倉の師範学校(注1)を卒業し、渋谷小学校へ先生として頑張って居りました。大勢の人に送られ、皆さんに「元気で行ってきます。後をよろしく」と力強くあいさつをして出発して行った頼もしい兄の姿を覚えています。

入隊後父母は、兄ちゃんに会いに行くと言って、厳しい訓練が続く身を案じつつ、モンペ姿で弁当におにぎりを持って行きましたが、渡すことすらできませんでした。この時の両親の淋しさを思うと、今でも心が痛みます。

その後間もなく航空母艦信濃(注2)で出航しましたが、台湾近海で、帰らぬ人となりました。一部助かった人もいられたので、「正夫は助かったかしら」と毎日言って居りました。葬儀の日には教え子が多数参加してくださり、代表してあいさつしてくれた。「先生を返して。先生声を出してください。」と大きな声で泣きさけぶ教え子たちに、一層悲しさが増したことを思い出します。

戦後59年の歳月が流れました。民主主義のもと平和国家として我が国は驚異的な飛躍発展をしてきました。混沌とした世相の中で、ただ今日1日を生きることを考え、苦難を生き抜いて頑張った方もいられました。私達遺族は今こそ団結し、なくなられた御霊の残された数々のお教えを心に銘じ平和の有難さと戦争の悲惨さを決して忘れることなく、いつまでも子や孫に語り継いでいこうと信じて居ります。

(注1) 鎌倉の師範学校……教員養成の学校のこと。今の横浜国立大学教育人間科学部（以前の教育学部）の前身。
(注2) 航空母艦信濃……太平洋戦争中に建造された、当時世界最大の空母。1944（昭和19）年11月竣工。米軍潜水艦の魚雷攻撃を受け、転覆。

夜中、目をさまして思う

比留川　榮子

何と静かなんだろう。ありがたい世の中になりました。スイッチ1つでおもう様になる、大正生まれの私には思ってもみない老後の生活です。

昭和20年の春、藤沢用田1キロメートルくらい南に爆弾が落ちて（厚木基地を狙ったものが外れたものだと思う）、父は自転車で見に行った。その頃の農家には自転車は1台あれば良い方、無い家も多くあった。内地も戦場でした。それから私達は、夜寝るときもモンペをはき、すぐ動ける様な格好で寝ました。3月、4月になると東京方面は焼け野原になった。

私の里、有馬村には千葉から兵隊さんが来て1,000人泊まっていました。本土決戦に備えて防空ごう壕をしました。お風呂は五右衛門風呂(注1)でした。先に相父母が入り、その後に兵隊さんが入ります。私や妹達は仕舞風呂(注2)でした。風呂場に明かりなどはむろんなく（ランプをつけてはいましたが）、ずいぶん汚れていただろうと今となって思います。この様な生活は隣近所皆同じでした。

今の様に、テレビや娯楽など無い時代、唯一の楽しみは、兵隊さんが歌を歌い、それを私達が一生懸命覚えたことでした。その歌をご紹介したいと思います。

「イヤだよ、イヤだよ軍隊はかねの茶わんにかねのはし、仏様でもあるまいに、一膳飯とは情けなや。」

「行くさきゃ千葉の習志野で、その名も戦車の2連隊、鬼の住むような2中隊、かわいい彼女と泣き別れ。」

「寝るも起きるもみなラッパ、アンパンかじる暇もなく、消燈ラッパが鳴り響く五尺(注3)の寝台わらぶとん、これがおいらの夢の床。」

「辛いつとめの不寝番居眠りしていて見られたら行かにゃならない従兵卒。」

「楽しかるべし祭日も憎い、2年兵の泥靴を磨かにゃならない哀れさよ。」

「海山遠く離れきて着いた手紙の嬉しさよ。かわいい彼女の筆のあと絞られ絞られ、送る日もやがて桜咲く4月には精勤賞や星の数、早く彼女に見せたいな。」

（みなさん元気でいられるかと思う）

(注1) 五右衛門風呂……鍋の底に一面の平釜を取り付けてかまどに据えた風呂。底板を浮かせて浮釜をし、入浴時はそれを踏み沈めて入る。
(注2) 仕舞風呂……終わりになって湯船の湯を抜き捨てる前ごろの風呂。また、それに入ること。
(注3) 五尺……およそ150センチメートル。

引揚船“故国を前に”

土肥　生齋

内蒙[注1]に侵攻のソ連外蒙軍との戦闘中、終戦の知らせを受け停戦撤退が始まり、途中、中共八路軍[注2]の攻撃を受けながら万里の長城を越え天津に着いて収容所の貨物廠に入ったのは年末だった。途中沿道の多くの住民から石を投げられ傷を負った兵士もいたが、抵抗もできず見返すだけだ。

収容所は奥地から引き揚げて来る兵士や邦人で満杯。ほとんど、安堵感や疲れから放心状態の様。乗船日時が指示されると、帰れる喜びと期待と不安の入り混じった表情で荷の整理を始める。

乗船の船が貨物船でなく米軍の上陸用舟艇（ＬＳＴ）なので、米軍からの要請で日本兵が乗務員として同乗、船内の保安や衛生その他の業務を米兵と協力してやってくれとの事で、上官から命令があり、選抜された隊員に特別腕章が渡される。いよいよ乗船する事になり、乗船の際に中国軍兵の身体検査があり、時計等が没収される。出航してから港外に出て速度の速いのには全員がすっかりまいってほとんど寝込んでしまい、病人が出る始末に。艦長付きの士官につたない英文の書面を提出してみたが、意味が了解できたのか、それ以降はスピードが遅くなりかなり楽になった。

出航してから1日目に幼い子を抱いた若い母親が子供の様子がおかしいという報告を受けたので、一般の邦人の中に医師がいるか確かめた結果、幸いにも内科医がいたので、早速同行の上、診察してもらったら肺炎でかなり危険な状態であるとのこと。医師も対応する薬品がないので米軍に申し入れたが、軍医が乗船していないということで船上ではどうにもならず、1日も早く日本につくことを祈るのみである。米軍にスピードを上げてくれと頼みたい所だが、今更それも出来ず全く困ってしまう。夜遅く、子供は母親や周りの人達の前で息を引き取った。

士官に死亡報告をしたが、無言のまま。米軍の通訳を通じて返事があり、それによると、公海上の規則から日本領海に入れば上陸まで遺体はそのままに置けるが、まだ中国領海なので水葬にしなければならないということらしい。やむなく事情を母親に伝える。周りの人達も仕方のないことだと納得してもらう。母親にしてみれば思い掛けないことなので断腸の思いだったかも知れない。子供の髪の毛の一部を切り取り紙に包むのを見ると、戦場で斃れた友に同じ事をしてやったのを思い出し感無量。夜明けを待って速度を落とした船上から、米兵の立会いのもとに敷布に包んだ子供の遺体をロープにつるし波の上に落とされるが、波間に消えていくのを見た母親は甲板に身を伏せ声を上げて泣き続ける姿は立会いの米兵も各々隊員も沈黙のまま、ただ見守るだけ。夜明けの黄海[注3]の波間に消えてしまった幼い遺体に敬礼する。生気を失い、ぼうぜんとする母親を隊員が促すと抱えるようにして船底に戻って行った。

甲板上に残って生死の境をたどってきた山や地がはるかに遠くへ離れていくのを振り返り、戦野に散った多くの友の事を思い浮かべ、「一緒に帰りたかったな」という思いと、幼い子の死を目の当りに見てつくづく戦争のむなしさを感じる一刻だった。

(注1) 内蒙――内蒙古。モンゴルのゴビ砂漠以南の地。
(注2) 中共八路軍――日中戦争時に華北で活躍した中国共産党軍。
(注3) 黄海――中国長江の河口以北、遼東・山東両半島と朝鮮半島にはさまれた海洋。